# PragmatismにおけるWilliam JamesとJohn Deweyの思想の比較考察

野　田　彦四郎

# A Comparative Study of William James and John Dewey With a Special Reference to their Thoughts on Pragmatism

Hikoshirô NODA

In the previous articles, I dealt with "The Influence of John Dewey's Pragmatism on Curriculum in Japan" and "Pragmatism and the Future of Moral Education in Japan."

The purpose of this present article is to compare the idea of william James with that of John Dewey, both being two representative philosophers of Pragmatism, and to study in detail the two ideas ; the former is moralistic and religious, while the latter is instrumental and operative.

In the final analysis, I intend to trace the history of this philosophy which has developed in America, starting from the study of the two.

## 緒　　言

現代世界における極めて重要な哲学として，われわれがPragmatismを，実存哲学，現象学などとともに挙げることには何人も異存はあるまい．そのPragmatismに関する論文として，私はさきに"Pragmatism and the Future of Moral Education"続いて"The Influence of John Dewey's Pragmatism on Curriculum in Japan"につき発表を重ねた．

そこでこのたびは表題の示すようにアメリカ　プラグマティズムにおける双璧と称せられるジェィムスとデューイを採りあげ，両者の思想の傾向につき，つぶさに考究して，前者が道徳的，宗教的であるのに対して後者が道具的，操作的であった思想内容を精説しようと試みた．そして最後に，これら二人の哲学者の研究が累積して遂に堂々たるプラグマティズム哲学が形成されるにいたった次第を究明しようと努めたのである．

### William James (1842-1910) 及び John Dewey (1859-1952) に先行する Pragmatism

ジェームズ及びデューイに先立ち，Pragmatismを開拓したのは何と言ってもCharles Sanders Peirce (1839-1914) である．彼は自らのPragmatismの特徴を示すために，ことさらに自らのそれを，Pragmaticismと呼んだ．アメリカ哲学における彼の位置は，それを表す好個の資料"Development of Peirce's philosophy"によっても明らかである．次に同書 (p.390) を掲げることにしよう．

> But why not simply adopt mass as the characteristic property of existents ? The answer lies in the fact that Peirce was an idealist. By translating mass

into other terms, it is perfectly possible to eliminate all assumptions concerning the existence of matter in favor of immaterial points which are centers of forces. Such a theory was in fact developed by the Jesuit Boscovich who in 1758 published a treatise entitled *Theoria Philosophiae Naturalis Redacta ad Unicam Legem Virium in Natura Existentium,* in which he argued that matter is nothing but an aggregate of immaterial points which are centers of inertia and of forces of attraction and repulsion.

パースの意図するところは彼の論文の主題が示すように「いかにして，われわれの観念を明晰ならしめるか」の方法論を確立するところにあった．彼は父親のベンジャミンパースの数学に興味を持ち，かつ父よりは実験室の精神と自然科学の研究方法を身につけるよう奨められていた．彼は上記の資料が物語るように「実在」の問題について，ニュートン以来の質量説に取り変えるに"Contignous Material Particles"即ち「粒子説」に賛意を表していた点でも明らかである．換言すれば「実在」は時間的，空間的，場所的に切れ目なく続くという所論である．彼の学説は当初は，ヘルツェゴビナ生れの Boscovich (1711-1787) (彼は数学者，物理学者，天文学者であり，イエズイタ派の牧師にして哲学者という博学であった) の深い感化を受け，更にその思想の根幹には Immanuel Kant の哲学が横たわっている．

パースの哲学に関する論説はその包括的な見解より Tychism (偶然主義) Synechism (連続主義) 及び Agapism (情愛主義) の三大教説として表明せられている．先ずタイキズムは自由と秩序という昔からの問題を，いわゆる偶然に関する教説として，宇宙的規模で論じている．次に，シネキズムは連続性に関する教説である．これは諸事物における相互連結性を強調するものである．そしてアガピズム，すなわち進化的愛の教説である．これは宇宙の進行の目的，とくに歴史を通じて明らかになる限りでの目的と解釈している．彼は進化については三つの様態がありうることを認めた．即ちダーウィン的形態，つまり突然変異による発展，次に必然的教説，即ち機械的，因果による発展，及び彼自身の創造的愛による進化の教説である．これらの中，最後に掲げた彼自身の見解を最も重要にして適切なるものと見ている．彼はこの愛に関する理論を「心」の発展を表現する法則と呼んだが，心ということで彼は感情という基本的性格に加えて機械的レベルにまで落ちこんでしまっていない習慣，つまり行動への一般的傾向をも含めて表現しているのである．彼の説く進化的愛は事物を完成させ事物の潜在的力や価値を引き出すことに向う成長，発展及び創造性である．それは利己的競争の反対である．こうして彼の哲学は壮大な進化的宇宙論に帰着するのである．パースの哲学論を総合的に考察するとき，彼はいわゆる形而上学者ではなく，本質的には科学との密接な関係を保持せんとする科学の哲学者であり，論理的，方法論的な立場を重視しつつアメリカにおける Pragmatism の先駆的努力を続けた人と称することができるのである．

**ジェームズ哲学のアメリカ Pragmatism において占める位置**

ジェームズの哲学は，一般に Pragmatism 及び根本的経験論 radical Empiricism という二つの名辞で特色づけられている．彼の哲学は多元論，根本的経験論及び主意的同意からなる理論構成であった．前述のようにパースのものの見方が論理及び数学に結びつけられる普遍性，に対する彼の情熱にあったとすれば，ジェームズのもののみ方は論理の従属及び生きた経験はいかなる形の普遍的理性のうちにも封じこめられ得ない，という主張のうちにその特色を見ることができるのである．こうした特徴については *The spirit of American philosophy* (p.40) には次のように明示している．(以下この書を S•A•P と略記する)

James developed a philosophy of pluralism, radical empiricism, and voluntary assent. If Peirce's view of things was distinguished by his passion for logic and the universality we associate with mathematics, James's outlook was marked by a subordination of logic and the claim that living experience cannot be contained in any form of universal.

ジェームズ哲学の結論は，吾人の経験は，経験が正当に理解される限り，それは出来事や事物を含むばかりではなく，出来事相互間の結びつきや物事相互の間の結びつきをも含むということである．経験はおのおのが全くそれ自体で存在し，他のいかなるものとも理解可能な結びつきを持たない静的な，固定した対象とは関わらない，と説くものである．この結論のうちにジェームズの根本的経験論の立場が明確に打ち出されている．「経験を結合する諸関係はそれ自らが経験された諸関係であり，経験されたいかなる種類の諸関係もその体系の中のいかなる他のものとも同様に実在的 (real) と認められるべきである．」という要請を指摘している．S•A•P には上述した事柄に関して次のように書いている．

James's conclusion is that experience, properly understood, includes not only events and things, but the connections between events and things. Experience does not concern itself with static or fixed objects, each of which exists all by itself without any intelligible connection with anything else.

彼はイギリスの経験論的伝統に賛同していたにも拘らずその論説のうち次の二点については断固として反対している．それは 1．経験はつねに単数の事実 —— この犬，この一隅にある褐色のベンチであって事物間の結びつきは経験の一部ではないということ．2．Diavid Hume の言うところの「因果の結びつきは経験に属していない」の二つである．彼は経験から事物間の「結合組織」を排除することを拒否した．そしてわれわれの現実の経験に細心の注意を向けるならば，そこに関係や移行が存在していることが明らかになると説く．彼は神は経験のうちに見出され得ないという伝統的経験論の主張から出発せずに，無限で究極の存在者というものの観念を人間に最初に暗示する根元的な人間経験を見出すことから取りかかったのである．

**ジェームズの三大基本概念 —— 目的，努力，及び信ずる意志と純粋経験の哲学**

We must now seek to understand James's three basic ideas--purpose, effort, and the will to believe--within the framework of his story of experience. (S•A•P, p.55)

この三つの基本観念のそれぞれがジェームズの Pragmatism を表しているが，これらを彼の経験論の中で考究しなければならない．上記 S•A•P に引続いて叙述すれば次の通りである．

彼の高唱する目的とはわれわれめいめいの「生」の全体を導き規制する最も有力な目的である．それは各人に安定感やなじみを与えてくれる世界，未来の行動を計画しても成功することが適度に保証されるような予測可能な世界，われわれの意志と努力が入りこむ余地のある世界，更に世界の進路を設定し，次に来るべきものの決定に参与することをわれわれに許すほど未来にたいし開かれている世界，そしてわれわれの努力に応答してくれるほどに柔軟な世界 —— を探し求める．このような合理性への探究は人間にとってすべてに勝る目的に相当する．

しかも世界も人間もともに完成してはいない．彼は世界と事物にたいする理解が前進できるためには前以て説明や仮説が提示されなければならないと考えた．そして仮説が一旦提示されるならばそこで探究者たちの努力を通して追求されることができる．そして人それぞれには目的に向って活動し大きく展開する未来を持つことを教えている．

1904年，アメリカ心理学協会を前にして彼が行った演説「活動の経験」の中で心や意志の効力，努力に関し彼は最終的な答えに辿り着いている．彼のユニークな「純粋経験」の哲学はそのすべての言葉の意味を誰にでも開かれている経験のうちに見出さなければならない．彼は努力し達成するという直接経験，この活動の経験を究極の事実として信用する．S•A•P (p.67) には次のように，このテーゼを擁護するために言葉巧みに主張している．

> Sustaining, persevering, stiriving, paying with effort as we go, hanging on, and finally achieving our intention--this is action, this is effectuation in the only shape in which, by a pure-experience philosophy, the whereabouts of it anywhere can be discussed....here is causality at work.

頑張ること，我慢すること，奮闘すること，努力をすること，しがみつくこと，そして最後にわれわれの意図を達成すること —— これが活動であり，これが成就への唯一の形態である．この形態において純粋経験の哲学は何事かを成し遂げるということの可能性について，どんな場合においても論議できる．--------ここに因果性が働いていると論じている．

**「信ずる意志」と道徳及び宗教との関係**

彼の言うところの「信ずる意志」と道徳的問題との関係については，われわれ個人の一身上の問題の解決との密接な関連において考察せねばならない．

第一は道徳・秩序に係る問題である．

> The first, and in many ways least defensible, case concerns the fundamental moral order. Since moral questions concern what is good or has worth, James concludes that they cannot be settled by sensible proof.

道徳的諸問題は何が善であるか，何が価値を有するかということに関っているために，それらは感覚に基づく証明によっては解決されない．もしわれわれが道徳的秩序を欲しなければ合理的理論はわれわれをしてそれを信ぜしめることはできない．われわれの諸活動を導くところの価値とその重要さに関する根本的な判断，それは「道徳的」でなければならないが，このことはわれわれの意志によってであり，知性によって決定されるのではないと，極度の主意主義の立場を貫いている．

第二は「信ずる意志」の他の側面に関る独創的境地である．

> More original and suggestive are the other aspects of the will to believe, for they show how "running ahead of the evidence" can make a contribution to experience and the gaining of new truths. One cane concerns, for example

「証拠に先立って走ること」が，いかにして経験と新しい真理の獲得に役立ち得るかを示している．例えば，神の存在，愛の力，友情関係，完成の永遠的性格，のごとき宗教諸問題などについて，もしわれわれが前もって理性的な証明が与えられるまでは，神の存在の可能性について断固として，拒否するならば，われわれは自分たちを納得させるかも知れない当のそのものを経験できるであろう場所に自らを置くことから切り離されるであろう．これら抽象的観念の「現金価値」は生き抜くことによって理解し，認識され得る．「信ずる意志」は存在可能な事実によって呼び出されるがしかし「信ずる意志」はそのような事実を創造する傾向を持ってはいない，と説いている．

第三は「信ずる意志」と宗教の果す役割について次のように記している．

> The third and closely related case represents James's strongest claim ; it is the situation in which willingness to believe in the possibility of a future fact

such as might prove a proposition, and willingness to act in accordance with that belief, is one of the facters helping to create the fact. Here the will to believe does more than place us in.

彼は，ほんものの宗教は個人の精神のざわめきのうちにのみ見出されうると述べ，宗教は心あるいは心情の直接に感知される状態として確立されるとしている．彼は宗教的信念を直接経験におけるその根までさかのぼって突きとめ，そして今度は向きを変えて宗教的信念が道徳のうちに生み出す果実をたどることによって科学と懐疑の時代における宗教の価値を明らかにしようとした．ここにわれわれは「神」及び「生」の宗教的側面に関する彼の考えをその哲学の絶頂と見なすことができる．そして同時に彼の伝統的信仰の再解釈がいかにアメリカ人らしい傾向を示しているかを発見するのである．

**ジョンデューイの哲学論の西洋哲学史において占める位置と彼の独特の立場，Empirical Theory of Ideas (経験的観念論)，Philosophical Naturalism (哲学的自然主義)，Anthropocentric Naturalism (人間中心的自然主義)．**

西洋哲学史の展開において17世紀から19世紀にわたるロックの認識論やカントの批判哲学がニュートン的物理学によって内容づけられたように，デューイの哲学はアインシュタイン的物理学によって意味づけられている．人類の知性を造化の神の制作とは見ないで，それ自体の力によって，進化の階梯を登ってゆく自然的存在の一つと考えるのがデューイである．このことは彼の論著，*The Influence of Darwin on philosophy and other Essays in Contemporary Thought* (1910) にも明らかであるように，19世紀科学の泰斗，ダーウインに影響される所が多く，必ずしもデューイの創造ではないにしても，それを信じその立場から知識の構成状況を吟味し，再構成しようとするのがデューイである．こうして彼の哲学はロックの経験論とカントの合理説をともに批判の対象に置くのである．これが彼独得の経験的観念であり，哲学的自然主義，人間中心的自然主義，経験的自然主義，自然主義的人間主義と称せられる哲学である．それは経験論でも観念論でもなく，実在論，唯物論の名によって呼ばれる立場でもない．行動(プラグマ)一元の立場である．

デューイ哲学は自然主義思想を一つの要素として成長したと考えられる．彼の自然主義は近代科学によって洗練された科学的自然主義と言える．彼の唱える自然主義は，従来の自然主義の思想が人間を自然に対立するものと考えて来たのに対して，即ち二つの対立する存在としての人間と自然との姿を前提とし，その自然に対して人間が随順する立場をもって自然主義と解したのに対して，そのような立場を容認しない．彼にとっては自然即ち人間である．人間は自然の中にあり，自然と共に存在するが，自然の尖端に立ち自然を超越することができる．そこに知性が存在するとなし，そこではただ狭義の自然を考えるのではなくして，われわれ人間の造り成して来た「社会」や「文化」をも主な研究対象となし，これを広義の「自然」"The Nature" として科学的経験的に認識しようとする世界観を提唱している．世界のあらゆる理性的なものが自然を母胎として生まれた．しかもこの自然の子は自然を省察し，自然を駆使しさえする．自然に即して，自然を左右し，自然を支配するという点にデューイ的自然主義の根本的立場がある．彼によれば人間の生活経験や教育もまた自然の自己開示 (Disclosure of the Nature itself) という意味をもっている．彼の哲学をまた Empirical Naturalism (経験的自然主義) とも呼ぶゆえんである．彼は又，自然と経験とは分離することはできず「経験それ自身が自然的であり，自然の行為あるいは表現である」と肯定し，「経験は自然以外，extra-natural，あるいは自然以上 Supernatural，あるいは自然以下，Sub-natural，のいかなる表現でもない」とも「経

験は自然に連続する」(Continuity of Nature) とも説いている．この間の論理について，S•A•P (p.127) には次のように叙述している．

> IN referring to this general outlook as a biological approach, Dewey was emphasizing the organic character of man and the continuous character of the environment. Above all, he tried to avoid any starting point "inside" the mind; man is primarily an organism and, while reflective thought--------

デューイは生物学的方法としての一般的展望に言及しながら，人間の有機的性格と環境の持続的性格を強調した．とりわけ精神「内部」のいかなる出発点をも彼は避けようとした．人間は元来有機体であり，反省的思想は有機体の最も重要な機能であることが解るが，われわれは人間の本性を全く知的な認識面だけと考えてはならない．生命は思考のみでなくそれ以上を包んでいる，と説いた．更に同書には，人間の環境的条件が変れば，人間的自然の主体的内部的な在り方も変るわけで，いわゆる永遠不滅の人間性というものはない．この意味から状況の客観的諸条件を変転せしめることにより，それに人間自体が反応する仕方によって人間は生成発展するものであると主張している．

**Instrumentalism (道具主義) 及び Inquiry (探究) と Operationalism (操作主義)**

Operationalism (操作主義) はデューイがいわゆる operative thinking による極めて重要な諸活動主義であって The Quest for Certainty には，従来から一部の不当な指導者たちが，この thinking を重視しなかったことをなじって「彼等指導者たちは，価値が現実の諸条件及び操作的諸活動を基礎として，人間の行為を統御しなければならぬものであり，この現実の諸条件と操作的諸活動に基づく人間の行為を統御しなければならぬものであり，この現実の諸条件と操作的諸活動に基づく人間の行為の統御によってだけ価値は実現せられることができるというこの重大な価値観を構成することを好まなかった」と指摘している (次記参照) 点に明瞭である．

> They have been unwilling to frame their conception of the values that should be regulative of human conduct to the basis of the actual conditions and operations by which alone values can be actualized (Q•C•P•280 p)

そして Instrumentalism (道具主義) は哲学をもって実際的，社会的，教育的，政治的，諸問題解決にとっての器具・道具となす主義であってデューイ哲学が典型的な Pragmatism と称せられるゆえんである．次の S•A•P にはじつにこれが明快に記述されているのを見ることができる．

> Instrumentalism means the doctrine that mind or intelligence exists as a problem-solving power and that this function is more important than pursuing the ideal of a purely theoretical and comprehensive knowledge of all things. (S•A•P)

更に Inquiry (探究) とは *Logic —— The Theory of Inquiry* によれば，(下の原文参照)「一つの統一された全体にまで，元の状況のもろもろの要素を転換するほどに，それを構成する区別や確定されているところの状態へ，不確定状況を統制され指導された仕方において変容することである」と定義されているように，デューイ哲学に強調する操作活動を推進し充実発展させる根幹的な課題究明の働きを意味するものである．

> Inquiry is the controlled or directed transformation of an indeterminate situation into one that is so determinate in its constituent distinctions and

relations as to convert the elements of the original situation into a unified whole.

そしてこの探究思考の発展的諸局面については同じく *Logic* に次のように六段階に順序的に主張する通りである．即ち，1．まず第一局面は，Indeterminate situation，未決定の状況にして，全ての探究思考は諸問題を内包したままの未決定の疑問状態から始まり，2．Institution of problem，すなわち問題設定の段階で，最初の漠然とした未決定の状態から一歩進んで問題的な事項が明白になってくる過程であり，3．Determination of a problem，問題解決の決定段階であり，問題が明確に設定されると解決の方法が自発的に暗示され，4．Reasoning，推論，即ち狭義の推論作用が為され，そして5．Testing Hypothesis by Action，テスト，行動による仮説の検証へと進み，6．Warranted Assertion，実験的行動の結果，「保証づきの言明」が得られる．この保証された言明は問題状況がいかにして決定的条件へ発展してきたかという報告であると共に未来の新問題探究の手段となり，又道具的使命を帯びてくるようになり，明日への発展に貢献するのである．

**デューイの力説する道徳概念の改造**

彼はその著書 *Reconstruction in philosophy* の中の *Moral Reconstruction* において，科学思想の変化が道徳観念と衝突するのはギリシャ哲学以来，大体において明瞭なことであると緒言し，従来，倫理学説において，「一般的な目的と法則を具体的境遇による規定に従属させるならば完全に混乱を生ずる」と思い込んで来たことは途方もない主張であると批判している．

これに反し，彼の pragmatism においては「具体的な境遇を唯一の道徳的な究極的特質とする第一の意義は道徳に課せられている負担を知力の方に移しかえることにあることが解るのである」と説き，更に道徳的境遇とは明白な行為を行うに先立って判断と選択が要求される境遇である，としている．われわれの道徳の実際的な意味を満足させるためには，求められる行為への正しいコースと善を発見することであるが，ここで探求が必要となって来る．この場合，彼は現在，人間性を苦しめている最大の二元論，即ち物質的で機械的で科学的なものと理想的で道徳的なものとの間に存在する分裂を破壊する必要を説く．そうすれば道徳が知力に焦点を結ぶと同時に知的な事物は道徳化され，自然主義と人道主義との厄介な紛争に終わりを告げると強調している．重ねてこのような一般的考察を次の四点にわたり詳述している．

These general considerations may be amplified. First: Inquiry, discovery take the same place in morals that they have come to occupy in sciences of nature.

第一．研究とか発見ということは，道徳にあっても自然科学において占めたと同様な地位を占める．日々の道徳生活において科学的知識を正当に活用し，人類が今日に至るまで進めて来た道徳的標準と理想を更に発展させる義務があるのである．

In the second place, every case where moral action is required becomes of equal moral importance and urgency with every other.

第二．　道徳的行為が必要であるいろいろな場合は，他のすべての場合と同様に道徳的価値と必要さをもつことになる．ともかくも生活上，目的であり，善であるものは価値，序列，品位，などにおいて，他の事情のもとにある同等の価値を持ち，同様な聡明な注意を払うに価するものである．

We note thirdly the effect in destroying the roots of Phariseeim. We are so accustomed to thinking of this as deliberate hypocrisy that we overlook its

intellectual premises.

第三.　形式拘泥説の根柢を破壊することが極めて重要である.

行為の目的を実際の境遇中に求めようとする考えにおいて，いかなる場合にも適用される同じ判断の標準をもつとするのは妥当ではない．教養ある人格を境遇上，身につけている者に対する標準は修練や経験の乏しい人がらに対する標準よりも一段と高いものであって，前者と後者に対し同じ判断の標準をもつものではない，すなわち人格の動きつつある方向によって判断さるべきであるという柔軟な価値判断が必要である.

In the fourth place, the process of growth, of improvement and progress, rather than the static outcome and result, becomes the significant thing.

第四.　生活の目的は最終目的としての完全ということではなく，完成し，成熟し，修行し，ゆく過程である．従って静的な結果よりも進歩の過程の方が重要である．成長自身こそ唯一の道徳目的なのである.

**Pragmatism におけるジェームズとデューイの思想の比較考察 —— 結語**

私はすでにジェームズとデューイの思想の特徴を強調し来ったわけでそれらに自らにして両者の思想を比較する数々が盛られてきたのであるが，更に総括的に相対比して考究すれば次のように要約できると思う.

先ず，ジェームズの思想には種々の要素があったが，その第一には彼が，最も具体的な実在とは主観と客観とが合一した状態であると考える点で，これが彼のいうところの“Stream of Consciousness”であり，主観と客観はこの意識の流れが固定化され反省化された際にできる二つの側面に過ぎないとするのである．第二には，彼は Pragmatism を観念論，唯物論のいずれをも越えた「方法」として確立する．彼は観念はそれを信ずることによって，人間の生活にどういう結果をもたらすかによって即ち有益であるかによってその観念が「真理」か「虚構」かが決定されるとなした．そして第三には「生命」を活動する生命，行為する生命として把える点である．生命とは個体と環境との機械的な関係でなく，環境に適応する機械そのものであると言うのである．第一，第二の点よりも，この第三の点についてこそデューイはジェームズより受け継いだ点だと自ら言明している．ここに両者の契合点を見るのである．デューイはこの拠点に立って，彼独特の強固な哲学を展開する．げに，*The Quest for Certainty* の訳者序文にも植田清次教授は「デューイ哲学，それは経験論でも観念論でもなく，実在論・唯物論・合理論の名によって呼ばれる立場でもない．行動(プラグマ)一元の立場である．ジェームズが Praqmatism を提唱したとき，そこには合理論と経験論の融合と帰一とが明らかに課題として掲げられたがその「自然科学としての心理学」の視野は必ずしもこの課題を全面的に解明しなかったと見られるが，同じ課題をデューイは掲げ，なかんずく現代科学の視野において，十分解明すると同時にいわば認識論史上に新しく巨大な歩武を進めている.」と激賞している．即ちデューイがドイツ観念論の絶対主義，一元論，主知的な諸点に真向から反対し，相対主義，多元論，反主知主義の立場をとる，Pragmatism の方法論を確立し逞しく前進したことを示している．こうした盤石不動の立地点に毅然として屹立する彼は，孤高とする Operationalism を強調し，その哲学は自らの縄ばりから出て科学と協同し，更に又科学間の縄ばりを破り，真に人間の問題解決のためにあくなき Inquiry を累積すべきであると主張した．こうした努力のプロセスにおいて，彼は知識の対象たる真理を，善や美と並ぶ目的価値とせず，これらを実現するための手段価値とする Instrumentalism によってつねに発展してやまない真理として究明し，この新しい合理主義的立場を発明して，新しい経済組織や社会制度まで改造せんとする社会化,

組識化への雄叫びをなしたのである．これこそジェームズと比較し，デューイが新天地を開拓した大きな業績と言うことができると思う．いや，この大事業を九十二歳の哲学者の単独の業績に限ることはできないであろう．それは，パース，→ジェームズ→デューイとよどみなく進展し続けてきたプラグマテイズム探究のあかしであり且つ又，それは二十世紀アメリカの総合的精神力の発露と言わずして何であろう．

## 引 用 文 献


1) J. Dewey: *Logic — The Theory of Inquiry*, 104～105, Henry Holt and Company (1951)
2) J. Dewey: *Reconstruction in Philosophy*, 161～186, The Beacon Press・Boston (1960)
3) J. Dewey: *Problems of Men*, 23～30, Philosophical Library. Now York (1976)
4) J. Dewey: *How we Think*, 28～33, D.C.Heath and Company. Boston (1933)
5) J. Dewey: *Experience and Nature*, 326～328, Dover Publications Inc・New York (1954)
6) J.Dewey and H.Tufts: *Ethics・Dewey and Tufts,* 26～36, Henry Holt and Company. New York (1954)
7) J. Dewey: *Domocracy and Education*, 163～178, The Macmillan Company. New York (1922)
8) J. Dewey: *Human Nature and Conduct,* 297～302, The Modern Libray. New York (1930)
9) J.Dewey: *The Quest for Cortainty*, 71～83, 〃 (1929)
10) 杉浦美朗：デューイにおける探究の研究，160～163，風間書房・東京 (1976)
11) J.E.Smith：*The Spirit of American Philosophy*, 頁は本文中に挙げる．Oxford University Press. (1963)
12) 松延・野田共訳：アメリカ哲学の精神，上記相応訳文頁．玉川出版部 (1981)
13) 仁戸田六三郎訳：哲学の改造，119～126，春秋社 (1950)